

私には鎌倉を語り継ぐ使命がある



まつなか

松中けんじ

マッチュー！ 鎌倉ひとすじ 無所属 40年

どぶ板議員の精神を忘れず。

私が議員に初当選した時、どぶ板議員と言われたことを思い出す。どつせ、若くして議員なつても、大したことは出来ない、壊れたどぶ板の取り替えぐらいだろうと。確かに、私はどぶ板の取り替え、使用不可能になった道路に埋設されたゴミ箱の撤去、道路の穴はこ修復等住民から頼まれ、行政へのお手伝いをした。また、頼まれることに何か、嬉しく思った。

どぶ板議員の精神とは、道路、側溝、インフラ等どんな大きな事業であつても、年数と共に老朽化が起きて、修理、修復等をしなければいけない、トンネルの天井が落下するとか、道路の穴に、つまずき怪我をするとか、一大事になることがある。そこには、市民の身近な声に、深い意味がある。転ばぬ先の市民の声が。

建設とメンテナンスは、不可分。大きな事業が完成すれば、必ず劣化が始まり、10年、20年で修理、あるいは、改修である。学校等箱物も同じである。そして、耐久年数が来る。鎌倉はまさに、その転換周期にある。

町づくりは「誕生、成長、寿命」と生き物のようだ。この原理を忘れていけない。どんなに都市が発展し、国が栄えても、この原理で考えると永遠ではない。大きくなればなるほど次世代へとツケが回っていく。

また、地震等の天変地異もある。災害対策、耐震対策だ。生活に密着している地方政治は、連日、連夜この流れの中で、動いている。それを支える財政をどう、扱つか、真剣勝負だ。

鎌倉市職員の全国一の高額退職金(三十五年前では五千万円が続出した)を私が問題にしたとき、市職員組合は、激しく抵抗した。もし、改正されなければ、市職員の退職金が一億円の時代が数年のうち実現すると言われた当時、私は同志と行革市長を誕生させ、国家公務員並みに引き下げた。市職員給与も最近まで、鎌倉市では全国トップクラスの評判、悪しき優遇制度であつたわたり制度を仲間と撤廃させた。

しかし、松尾市長は組合側に付き抵抗した。今や共産党が市長の与党的立場だ。松尾行革市長の行革の公約と真逆だ。大地震も想定され、インフラ整備、施設のメンテナンス経費で、財政は追われるであろう。行革は議員が行政と対峙した真剣なやりとりはまさに死闘である。地方議会、地方政治、自治体経営は、生半可なことでは務まらない。パフォーマンス選挙では、絶望的だ。私は一人でも戦う。

私は欠陥道路だと警告していたが、あつてはならない事態が国道134号線で起きている。稲村ヶ崎や小坪トンネル際の崩壊。下水道汚染水の海への大量放流、交通規制による大渋滞。これもインフラ劣化。想定されている大地震に対し防災対策は優先すべきだ。下水道管復旧に十億円近くの費用が掛かった。

国道134号線は鎌倉の生命線だ。

